

高校アイスホッケー部活動における指導者のリーダーシップ行動と 動機づけ雰囲気および目標志向性の関連

早乙女 誉^{1), 2)}

The relationship among leadership behavior, motivational climate and goal orientation in Japanese high school ice hockey players

Homare Saotome^{1), 2)}

Abstract

This study aimed to examine the effect of coaches' leadership behavior and the perceived motivational climate created by coaches on players' goal orientation among Japanese high school ice hockey players.

One hundred and eighty-five players completed a questionnaire survey in September 2010, which fell in the middle of the athletic season. Respondents were recruited from the 27 teams that participated in the national high school ice hockey tournament in January, 2010. The research items included 1) coaches' leadership behavior, 2) motivational climate, 3) goal orientations and 4) background information (e.g., age, position and years of ice hockey experience). Path analysis was used to examine the predictor of goal orientations.

Path analysis revealed that, through motivational climate, leadership behavior indirectly predicted goal orientations rather than directly predicted, whereas motivational climate predicted goal orientations.

In conclusion, these results highlight that leadership behavior plays a critical role in the creation of a motivational climate which changes players' goal orientation.

Key words: performance-maintenance (PM) theory of leadership, extracurricular sports activities, path analysis
リーダーシップPM論, 運動部活動, パス解析

I. 緒言

ジュニアスポーツにおいて、指導者は選手のスポーツ経験の質に大きな影響を及ぼすことが指摘されている (Smith et al., 2007; スモール・スミス, 2008)。特に、指導者にとって、青少年期の選手のスポーツ活動を促進することは重要な役割のひとつであり、選手のスポーツ活動への動機づけを効果的に高める方策について検討することは重要な問題である。

近年、スポーツ選手の動機づけに関する理論の1つとして達成目標理論が注目されている (レビューとして、Biddle et al., 2003; 西田・小縣, 2008)。達成目標理論の中心概念は目標志向性 (特定の目標を達成しようとする個人の傾向: Nicholls et al., 1985) であり、目標志向性は課題志向性 (task orientation) と自我志

向性 (ego orientation) の2種類に大別されてきた。課題志向性とは、一生懸命に努力することや自分自身の成長を重視する傾向であり、「自己ベストを出したい」、「もっと上手になりたい」といった目標に興味を持つ。これに対して自我志向性とは、相対的な比較のうえで他者に勝つことを重視する傾向であり、例えば「相手に勝ちたい」や「一番になりたい」といった目標を好んで設定する。

国内外におけるこれまでの研究では、前者の課題志向性が、望ましい動機づけパターンに肯定的な影響を与えることが確認されている。例えば、課題志向性はスポーツの楽しさや興味 (Duda, 1989)、参加動機や有能さ、内発/外発的な動機づけ (細田・杉原, 1999; 伊藤, 1996)、向社会的行動 (Kavussanu, 2006) と肯定的に関連することが報告されている。その一方で、自

1) 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科
Graduate School of Sport Sciences, Waseda University

2) 阪南大学
Hannan University

我志向性は攻撃的な行為 (Dunn & Dunn, 1999), 競技不安 (Smith et al., 2006), 反社会的行動 (Kavussanu, 2006), 外傷の既往歴 (Steffen et al., 2009), モラルの欠落 (Boardley & Kavussanu, 2010) と肯定的に関連することが報告されている。

選手の目標志向性に影響を及ぼし得る指導者側の要因に関しては、指導者がつくり出すチーム内の雰囲気や、指導者のリーダーシップ行動に着目して検討されてきた。チーム内の雰囲気については、Ames (1992) が集団内の構造をどのように認知しているかによって目標の持ち方が変わるという考えから、動機づけ雰囲気 (motivational climate) という概念を提唱した。この雰囲気は、指導者やチームメイトといった重要な他者によってつくり出され、目標志向性と同様に、技術向上や目標達成に向けた努力が重視される課題関与的雰囲気 (task-involving climate) と、結果や他者との比較を重視する自我関与的雰囲気 (ego-involving climate) の2次元が仮定されている (Newton et al., 2000)。これまでの研究では、チーム内の課題関与的雰囲気は選手の課題志向性に、自我関与的雰囲気は自我志向性に影響を及ぼすことが報告されている。例えば、Gano-Overway and Ewing (2004) は、体育授業に参加した大学生を対象とし、指導者がつくるチーム内の動機づけ雰囲気を測定する尺度である Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2 (PMCSQ-2; Newton et al., 2000) を用いて、相対的に課題関与的雰囲気の認知が高く、課題志向性が低い学生は、学期開始時から終了時までの13週間で、課題志向性が有意に増加することを明らかにした。また、同じく PMCSQ-2 を用いて体育授業の一環としてスポーツチームに所属した中学生を対象とした研究 (Boyce et al., 2009) においても同様の傾向が示されている。一方、我が国における研究では、Saotome et al. (2012) が、高校アイスホッケー部に所属する選手を対象とし、日本語版の PMCSQ-2 を用いて、シーズン中盤 (10月) からシーズン終了時 (2月) にかけての課題志向性の変化は、同期間における課題関与的雰囲気の変化によって規定されることを明らかにしている。

指導者のリーダーシップ行動については、Wang et al. (2009) が、高校のバスケットボール選手を対象にし、Leadership Scale for Sport (LSS; Chelladurai and Saleh, 1980) と The Achievement Goal Questionnaire (AGQ; Wang et al., 2007) を用いて、リーダーシップ行動と4つの達成目標 (熟達接近目標; 熟達すること

を目指す目標、熟達回避目標; 熟達できないことを避ける目標、成績接近目標; 他者より優れることを目指す目標、成績回避目標; 他者より劣ることを避ける目標) との関係について検討した。その結果、LSSを構成する5つのリーダーシップ行動のうち「training and instruction」と「democratic behavior」, 「social support」, 「positive feedback」が熟達接近目標と熟達回避目標と肯定的に関連する一方で、それらのリーダーシップ行動と成績接近目標との関連は認められなかったことを報告している (なお、成績回避目標は信頼性が低かったため、その後の分析から削除された)。

しかしながら、目標志向性の先行要因に関する先行研究では、動機づけ雰囲気とリーダーシップ行動が同時に分析されていないため、これらの変数の関係については明らかにされていない。島本・石井 (2007) が、媒介要因 (メンタルヘルス) に着目し、スポーツ経験がライフスキルに及ぼす直接的・間接的な影響について検証することで、変数間の因果関係を高い精度で予測するモデルを構成したように、動機づけ雰囲気とリーダーシップ行動を同時に分析することで、目標志向性に及ぼす直接的・間接的影響が明らかとなり、指導者が選手の目標志向性を変化させるメカニズムの解明につながる事が予想される。Smith et al. (2005) は、高校の女子バスケットボール選手を対象にし、Coaching Feedback Questionnaire (Amorose and Horn, 2000) を用いて、指導者の肯定的なフィードバック (positive feedback) が、選手が認知している課題関与的雰囲気に対して正の影響力を有する一方で、指導者が選手の失敗を放置しておくこと (ignore mistakes) が、同雰囲気に対して負の影響力を有していることを明らかにしている。さらに、同研究では、選手が認知している自我関与的雰囲気に対しては、positive feedbackが負の影響力を、罰を重視するフィードバック (punishment-oriented feedback) が正の影響力を有していることを報告している。このようなことから、指導者のリーダーシップ行動は、選手の目標志向性に直接的に関係するだけではなく、動機づけ雰囲気を媒介して間接的にも関係していると考えられる。リーダーシップ行動が動機づけ雰囲気を媒介して目標志向性に関与しているのであれば、指導者の行動が雰囲気をつくり、その雰囲気が選手に認知されることで選手の目標志向性が変わるという一連の流れを想定することができる。

そこで本研究では、指導者が選手の目標志向性を変化させるためには、動機づけ雰囲気とリーダーシップ

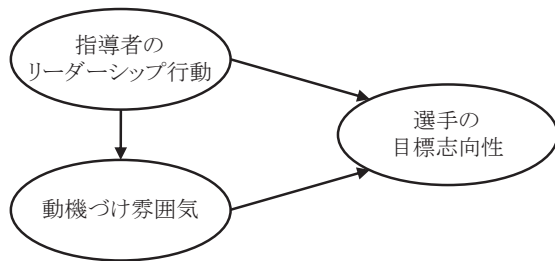


図1 リーダーシップ行動からの間接的な影響と直接的な影響を仮定したモデル

行動のどちらが有効なのかという観点から、これらの変数の関係を明らかにし、目標志向性が影響を受けるメカニズムについて検討することを目的とする。具体的には、指導者のリーダーシップ行動が選手の目標志向性に影響するという直接的な関係と、リーダーシップ行動が動機づけ雰囲気を媒介して関与するという間接的な関係を想定したモデル(図1)を用いて、パス係数の有意性によって各変数間の関係を検証する。これによって、指導者が選手の目標志向性を変化させる手がかりが得られることにより、選手を目標達成へと導くコーチング学の発展に貢献すると期待される。なお、指導者のリーダーシップ行動は、三隅(1972)のリーダーシップPM論¹⁾に基づいて作成された尺度(伊藤, 1993)によって測定する。伊藤(1993)は、①P機能とM機能があらゆる集団のリーダーシップの基本的機能であるとされている(三隅, 1972)こと、②わが国のスポーツ集団の研究において最も広く用いられ、スポーツ集団におけるリーダーシップを考える上で有効であることが示されてきている(例えば、丹羽, 1978)ことを理由に、指導者(コーチ)の行動をリーダーシップPM論の立場からとらえた。伊藤(1993)に倣い、わが国のスポーツ集団を対象とした本研究においても、同様の理由からリーダーシップPM論を援用する。

II. 方法

1. データ収集と対象者

本研究では、第59回全国高等学校アイスホッケー選手権大会(2010年1月・北海道)に参加した高校アイスホッケー部(27チーム)に、2010年7月の時点で所属する男子選手を対象とした。事前に、対象者が所属する部の顧問と対象者および対象者の保護者から研究参加の同意が得られた218名に対し、郵送法による

質問紙調査を、2010年の10月に実施した。質問紙は、自宅(下宿先、寮)に郵送し、返信用封筒にて回収した(回収数212名、回収率97.2%)。本研究は、早稲田大学内における研究倫理審査委員会の承認(申請番号:2010-070(1))を得て実施された。

2. 測定項目

1) 指導者のリーダーシップ行動

指導者のリーダーシップ行動の測定には、伊藤(1993)が作成した22項目で構成される尺度を用いた。この尺度は、P機能に対応する2因子(「技術的指導」と「管理」)とM機能に対応する2因子(「親和的調整」と「配慮」)で構成されている。対象者にはこれらの項目に「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5段階評定で回答を求めた。P機能に対応した項目の内容は、「技術的指導」に関する6項目(例えば、「練習について批評し、指示や命令を与える」)と「管理」に関する4項目(例えば、「練習を無断で欠席したり遅刻したりすると注意する」)であった。一方のM機能に対応する項目は、「親和的調整」に関する9項目(例えば、「部員の個人的な悩みの相談にのってくれる」)と「配慮」に関する3項目(例えば「よいプレーをした時には、ほめてくれる」)であった。

2) 指導者がつくる部活動内の動機づけ雰囲気

動機づけ雰囲気の測定にはPerceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2(Newton et al., 2000)の日本語版尺度(早乙女ほか, 2011)を用いた。この尺度は、対象者が認知している動機づけ雰囲気の程度を測定する尺度であり、2つの上位因子が、それぞれ2つの下位因子を持つ構造となっている。上位因子の1つが課題関与的雰囲気であり、下位因子は「協力・重要な役割(“このチームでは、各選手がそれぞれ重要な貢献をしている”など7項目)」、「努力・向上(“このチームでは、一回一回の試合や練習を良くしていくことが重要視される”など3項目)」の2因子で構成されている。もう一方の上位因子は自我関与的雰囲気と呼ばれ、「不平等な評価(“このチームでは、最も良い成績を出した選手だけがほめられる”など5項目)」と「失敗に対する罰(“このチームでは、選手がミスをしたとき、罰を受ける”など3項目)」の2つの下位因子で構成されている。各項目は、「このチームでは」で始まり、その後に質問が続くかたちとなった。回答方法は、「全くそう思わない(1点)」から

「非常にそう思う(5点)」の5段階評定とした。なお、内的整合性は、先行研究(早乙女ほか, 2011)において十分な値(課題関与的雰囲気: $\alpha = .80$; 自我関与的雰囲気: $\alpha = .77$)を示している。

3) 目標志向性

目標志向性は、伊藤(1996)が作成した尺度を参照し、表記に際して「運動」を「運動(プレー)」へと修正した18項目を用いた。対象者には「スポーツのどのような場面で楽しさや喜びを感じるか」という質問に対し、「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5段階評定で回答を求めた。各項目の内容は、課題志向性に関する7項目(例えば、「どうしたらうまくできるのかをいろいろ工夫しているとき」と自我志向性に関する11項目(例えば、「他の人から注目されたとき」)であった。先行研究(伊藤, 1996)において、内的整合性は十分な値(課題志向性: $\alpha = .90$; 自我志向性: $\alpha = .85$)を示している。

4) 対象者の競技特性

対象者の特徴を把握するために、学年、所属チーム、ポジション、競技年数に関して回答を求めた。

3. データ解析

全回答者212名のうち、全ての項目に欠損無く回答した185名を解析対象者とした。指導者のリーダーシップ行動と部内の動機づけ雰囲気、選手の目標志向性の関係を検証するために、先行研究(Smith et al., 2005; Wang et al., 2009; 早乙女ほか, 2011)に従い、「リーダーシップ行動 → 目標志向性」と「リーダーシップ行動 → 動機づけ雰囲気 → 目標志向性」という関係を想定したモデルを構築した。リーダーシップ行動を外生変数、動機づけ雰囲気と目標志向性を内生変数とし、P機能とM機能のそれぞれから課題関与的雰囲気と自我関与的雰囲気へのパスを仮定した。次に、リーダーシップ行動が目標志向性と関連するというWang et al. (2009)の指摘に基づき、リーダーシップ行動のP機能とM機能を独立変数、両志向性を従属変数とし、全ての独立変数からのパスを仮定した。動機づけ雰囲気から目標志向性へのパスについては、早乙女ほか(2011)の結果に基づき、課題関与的雰囲気から両志向性、自我関与的雰囲気から自我志向性へのパスを仮定した。各変数は、それぞれの尺度を構成する項目の得点を合計した観測変数として解析に用い

た。

適合度の指標は、Goodness of Fit Index(以下、GFI)とAdjusted Good of Fit Index(以下、AGFI)、Comparative Fit Index(以下、CFI)、Root Mean Square Error of Approximation(以下、RMSEA)の4つを使用した。GFI、AGFI、CFIは値が1に近いほどモデルの説明力が高いとされるため(豊田ほか, 1992)、0.9以上をモデル採用の判断基準とした。RMSEAは、0に近いほどよいモデルとされるため(山本, 1999)、0.08以下を判断基準とした。なお、目標志向性の下位因子間には中程度の相関があることが予想されたため、両者間に誤差相関を想定することとした。以上の統計解析には、PASW Statistics 18とAmos 16を使用した。

III. 結果

1. 解析対象者の特徴

解析対象者の特徴を表1に示した。平均競技年数は 9.34 ± 2.77 年であった。対象者の学年は、1年生33.5%、2年生36.7%、3年生が29.2%となった。ポジション別に見ると、FW(forward)が53.2%、DF(defense)が33.5%、GK(goalkeeper)が13.3%であった。

2. 各変数の基本統計量と相関関係

各変数の平均と標準偏差、変数間の相関係数を表2に示した。P機能とM機能の間には弱程度の有意な相関関係が確認された。また、P機能は課題関与的雰囲気と課題志向性、自我志向性との間にも弱程度の有意な相関が認められたが、自我関与的雰囲気との間には有意な相関は確認されなかった。一方のM機能は、課題関与的雰囲気と課題志向性との間に弱から中程度の有意な相関が認められ、自我関与的雰囲気との間には中程度の有意な負の相関が確認された。リー

表1 解析対象者の特徴(n=185)

	n	%
学年		
1年生	62	33.5%
2年生	69	36.7%
3年生	54	29.2%
ポジション		
FW	98	53.0%
DF	62	33.5%
GK	25	13.5%
平均競技年数(S.D)	9.34年(2.77)	

表2 各変数の基本統計量と相関係数 (n=185)

	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5
1. P機能	3.54	0.42					
2. M機能	3.38	0.63	0.24***				
3. 課題関与的雰囲気	4.01	0.48	0.35***	0.47***			
4. 自我関与的雰囲気	2.55	0.65	0.05	-0.40***	-0.26***		
5. 課題志向性	4.07	0.60	0.20**	0.30***	0.48***	-0.07	
6. 自我志向性	3.87	0.61	0.19*	0.05	0.19**	0.21**	0.31***

注. 各変数は5段階評定で測定した
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ダーシップ行動尺度の信頼性係数は、P機能が $\alpha = .85$ 、M機能が $\alpha = .58$ であった。

3. リーダーシップ行動と動機づけ雰囲気および目標志向性の三者関係

指導者のリーダーシップ行動と部内の動機づけ雰囲気および選手の目標志向性の関係性について検討するために、リーダーシップ行動と目標志向性の直接的な関係と、動機づけ雰囲気を介した間接的な関係を仮定してパス解析を行った。その結果、十分な適合度指標は得られなかった (GFI = .960, AGFI = .931, CFI = .940, RMSEA = .092)。そこで、5%水準で有意ではなかったパスを削除したモデルを作成し、再度パス解析を実施した結果、モデルの適合度はすべての指標において適合が良いと判断される値が認められた (GFI = .984, AGFI = .943, CFI = .983, RMSEA = .054)。最終的なモデルを図2に示す。各変数間の統計的な因果関係については、リーダーシップ行動のP機能が課題関与的雰囲気と自我関与的雰囲気とに正の有意な影響を及ぼし (課題関与的雰囲気; $\beta = .26, p < .001$, 自我関与的雰囲気; $\beta = .16, p < .05$)、M機能が課題関与的雰囲気とに正の、自我関与的雰囲気に対しては負の有意な影響を及ぼしていた (課題関与的雰囲気; $\beta = .41, p < .001$, 自我関与的雰囲気; $\beta = -.44, p < .001$)。P機

能およびM機能から目標志向性への直接的な影響は認められなかった。動機づけ雰囲気が目標志向性に及ぼす影響については、課題関与的雰囲気が課題志向性と自我志向性に有意な影響を及ぼし (課題志向性; $\beta = .48, p < .001$, 自我志向性; $\beta = .26, p < .001$)、一方の自我関与的雰囲気は自我志向性だけに有意な影響を及ぼしていた ($\beta = .26, p < .001$)。

IV. 考察

本研究の目的は、仮定したモデルをもとに指導者のリーダーシップ行動と動機づけ雰囲気および選手の目標志向性の関係を検証することであった。これまでの研究では、指導者が作り出す雰囲気や指導者の行動が選手の目標志向性と関連することが広く報告されている。しかし、選手の目標志向性を高めるためには雰囲気と指導者の行動のどちらが重要なのかという観点から、目標志向性が影響を受ける過程でそれぞれが果たす役割について検討した研究は十分になされていない。そこで、リーダーシップPM論を援用し、指導者のリーダーシップ行動と部内の動機づけ雰囲気から選手の目標志向性が影響を受けるメカニズムを明らかにした点が本研究の意義である。

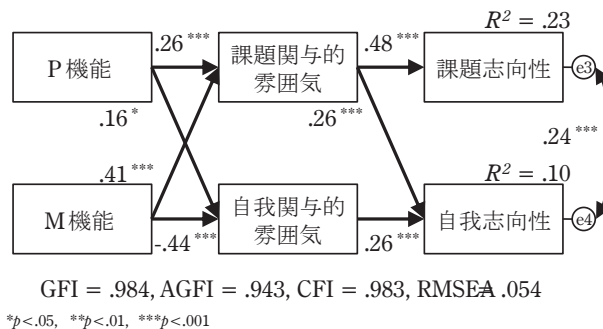


図2 動機づけ雰囲気を介した間接的な影響を仮定したモデルのパス解析 (n=185)

パス解析によって仮説モデルを検証した結果、指導者のリーダーシップ行動は動機づけ雰囲気を通して間接的に目標志向性に影響を及ぼすことが確認され、目標志向性に対するリーダーシップ行動の直接的な影響力は認められなかった。これまでの研究 (Smith et al., 2005) では、指導者のフィードバック行動が動機づけ雰囲気を規定する要因の1つであることが確認されている。また、Smith et al. (2007) は、行動指針を示した指導者教育プログラムによって指導者に介入することで、選手が認知する課題関与的雰囲気を変えられる可能性を示唆している。本研究においても、指導者のリーダーシップ行動によって動機づけ雰囲気が増える可能性を支持する結果となった。その一方で、リーダーシップ行動は直接的に選手の目標志向性には影響しない可能性が示された。これらの結果は、指導者の行動によってチーム内の動機づけ雰囲気が醸成され、選手がその雰囲気を認知することで選手の目標志向性が増えるというメカニズムを示唆するものである。以上のことから、指導者が選手の目標志向性に働きかけるためには、日々の行動によって望ましい動機づけ雰囲気をチーム内に定着させることが重要であると考えられる。

下位因子間の関係については、リーダーシップ行動におけるP機能は、課題関与的雰囲気と自我関与的雰囲気の両方の雰囲気に対して、正の影響を及ぼすことが確認された。高校運動部活動の指導者のリーダーシップ行動に関する先行研究 (伊藤, 1993) では、P機能の下位因子として、「技術的指導」と「管理」があり、前者は、競技力の向上に寄与する行動として位置づけられている一方、後者は罰に対する選手の認知を強めると指摘している。これを踏まえると、本研究の結果は、指導者が競技力を向上させるための行動をとることで、各部員の役割や技術向上を重要視する雰囲気が高まる一方、部の規則を順守させるといった管理行動によって、部内の自我関与的雰囲気が高まる可能性が考えられる。一方のM機能は、課題関与的雰囲気には正の影響を、自我関与的雰囲気に対しては負の影響を及ぼすことが明らかになった。コーチのフィードバックと動機づけ雰囲気の間接性について検討した先行研究 (Smith et al., 2005) では、良いプレーを称賛するフィードバック (例えば、“Good play!”) や失敗を励ますフィードバック (例えば、“That’s O.K. Keep working at it!”) が課題関与的雰囲気と関連することが示唆されている。加えて、同研究では、指導者の肯定的なフィードバックがチーム内の自我関与的雰囲気

に負の影響を及ぼすことが指摘されている。これらのことから、指導者が選手の成功や努力を評価し、失敗に対して配慮することで、部内の課題関与的雰囲気が高まり、自我関与的な雰囲気を抑制できると考えられる。

ただし、本研究はいくつかの限界点を含んでいる。限界点の1つ目は、本研究で使用した指導者のリーダーシップ行動の尺度を作成した先行研究 (伊藤, 1993) では各因子の信頼性についての記述がなく、本研究で信頼性係数を算出したところM機能が低い値を示した ($\alpha = .58$)。したがって、今後は、指導者のリーダーシップ行動を測定する新たな尺度を作成したうえで、本研究で明らかにした関係を追証し、より具体的に、どのようなリーダーシップ行動がどのような雰囲気と関係するのかといった視点から考察することが求められよう。2つ目の限界点としては、本研究では、対象者を全国大会に出場した高校アイスホッケー部活動に所属する男子選手に限定したため、競技レベルや競技特性が結果に影響した可能性がある。Reilly et al. (2000) は、青少年サッカー選手を対象にして、プロクラブと契約しているエリート選手と契約していないサブエリート選手の目標志向性を比較し、サブエリート選手に比べてエリート選手の課題志向性が有意に高いことを報告している。そのため、全国レベルの部活動から抽出した本研究の対象者も地域レベルの部活動に所属する選手に比べて、課題志向性が高かったことが予想される。指導者のリーダーシップ行動や部内の動機づけ雰囲気についても同様の傾向があるかもしれない。競技の特性については、アイスホッケーはボディコンタクトが多く、激しい競技であることから、本研究の対象者は、他の競技の選手と比較して闘争心や競争心が高い集団であったと考えられる。また、集団競技に関わるのが一体感や協調性といったチームワークを維持するための意識と関連している可能性もある。したがって、今後は競技レベルや競技特性といった一般化にかかる問題に留意した上で、指導者のリーダーシップ行動と動機づけ雰囲気、目標志向性の関係について検討することが重要であろう。最後に、3点目の限界点として、本研究で得られた知見は、あくまでも統計的な因果関係であるため、指導者のリーダーシップ行動が部内の動機づけ雰囲気と選手の目標志向性に及ぼす影響について厳密な因果関係について言及することはできない。

本研究の知見をまとめると、指導者が選手の目標志向性を変化させるためにはチーム内の動機づけ雰囲気

のような環境要因を利用したアプローチが有用であり、リーダーシップ行動は雰囲気をつくるための手段の1つであるという可能性が示された。今後は、本研究によって導かれた結論を、縦断的調査や介入研究など、より質の高い研究デザインに基づいて検証していくことが望まれる。将来的には、そのような研究から得られる知見に基づいて、現場に適用できる指導方法が開発され、我が国のコーチング学の発展や競技力向上に貢献することが期待される。

注 記

- 1) 企業組織体における研究によって構築されたリーダーシップPM論(三隅, 1972)によると、リーダーシップ行動には、集団の目標達成や課題解決を促進させるP(Performance)機能と、集団の自己保存ないしは集団の過程それ自身を維持し強化しようとする機能であるM(Maintenance)機能の両面が含まれると考えられている。

謝辞

本研究は、文部科学省グローバルCOEプログラム「アクティブ・ライフを創出する科学」による研究の一部である。本研究の実施にあたり、早稲田大学スポーツ科学学術院の中村好男先生には多大なご指導を頂きました。また、日本学術振興会の原田和弘先生には、数多くの貴重なご意見を頂きました。記して感謝の意を表します。

本研究の資料収集にあたって、ご協力頂いた高等学校の先生ならびに生徒の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

文 献

Ames, C. (1992) Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In: G. Roberts (Ed.), *Motivation in sport and exercise* (pp. 161-176). Champaign, IL: Human Kinetics.

Amorose, A. and Horn, T. (2000) Intrinsic motivation: Relationship with collegiate athletes' gender, scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 22:63-84.

Biddle, S.J.H., Wang, C.K.J., Kavussanu, M., and Spray, M. (2003) Correlations of achievement goal orientations in physical activity: A systematic review of research. *European Journal of Sport Science*, 3:1-20.

Boardley, I.D. and Kavussanu, M. (2010) Effects of goal orientation and perceived value of toughness on antisocial behavior in soccer: The mediating role of moral disengagement. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 32:176-192.

Boyce, B.A., Gano-Overway, L.A., and Campbell, A.L. (2009) Perceived motivational climate's influence on goal orientations, perceived competence, and practice strategies across the athletic season. *Journal of Applied Sport Psychology*, 21:381-394.

Chelladurai, P. and Saleh, S.D. (1980) Dimensions of leader behav-

ior in sports: Development of a leadership scale. *Journal of Sport Psychology*, 2:34-45.

Duda, J.L., (1989) The relationship between task and ego orientation and perceived purpose of sport among male and female high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11:318-335.

Dunn, J.G.H., and Dunn, J.C. (1999) Goal orientations, perceptions of aggression, and sportpersonship in elite male youth ice hockey players. *The Sport Psychologist*, 13:183-200.

Gano-Overway, L.A. and Ewing, M.E. (2004) A longitudinal perspective of the relationship between perceived motivational climate, goal orientations, and strategy use. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 75:315-325.

細田朋美・杉原 隆 (1999) 体育の授業における特性としての目標志向性と有能さの認知が動機づけに及ぼす影響. *体育学研究*, 44:90-99.

伊藤豊彦 (1993) コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力との関係の再検討 —リーダーシップPM論からのアプローチ—. *島根大学教育学部紀要 (教育科学)*, 27:27-35.

伊藤豊彦 (1996) スポーツ場面における目標志向性の予備的検討. *体育学研究*, 41:261-272.

Kavussanu, M. (2006) Motivational predictors of prosocial and antisocial behaviour in football. *Journal of Sports Sciences*, 24:575-588.

三隅二不二 (1972) リーダーシップPM論. 三隅二不二編. *現代経営学全集 第7巻 リーダーシップ*. *ダイヤモンド社*: 東京, pp.168-218.

Newton, M.L., Duda, J.L., and Yin, Z. (2000) The perceived motivational climate in sport questionnaire-2. *Journal of Sports Sciences*, 18:275-290.

Nicholls, J.G., Patashnick, M., and Nolen, B. (1985) Adolescents' theories of education. *Journal of Educational Psychology*, 77:683-692.

西田 保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理論の展望. *総合保健体育科学*, 31:5-12.

丹羽劭昭 (1978) 大学における運動部員の集団魅力の変化について. *スポーツ心理学研究*, 4:49-56.

Reilly, T., Williams, A.M., Nevill, A., and Franks, A. (2000) A multidisciplinary approach to talent identification in soccer. *Journal of Sports Sciences*, 18:695-702.

早乙女誉・原田和弘・中村好男 (2011) 高校アイスホッケー部活動における動機づけ雰囲気と目標志向性の関連. *スポーツ産業学研究*, 21:111-120.

Saotome, H., Harada, K., and Nakamura, Y. (2012) The relationship between change in perceived motivational climate and change in goal orientations among Japanese ice hockey players. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 7:81-88.

島本好平・石井源信 (2007) スポーツ経験とライフスキルの因果モデル構成の試み. *スポーツ心理学研究*, 34:1-9.

Smith, R.E., Smoll, F.L., Cumming, S.P., and Grossbard, J.R. (2006) Measurement of multidimensional sport performance anxiety in children and adults: The Sport Anxiety Scale-2. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 28:479-501.

Smith, R.E., Smoll, F.L., and Cumming, S. P. (2007) Effects of a

- motivational climate intervention for coaches on young athletes' sport performance anxiety. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 29:39-59.
- Smith, S.L., Fry, M.D., Ethington, C.A., and Li, Y. (2005) The effect of female athletes' perceptions of their coaches' behaviors on their perceptions of the motivational climate. *Journal of Applied Sport Psychology*, 17:170-177.
- スモール・スミス：市村操一訳 (2008) ジュニアスポーツにおけるコーチ行動の研究と介入. スモール・スミス編, 市村操一ほか監訳, *ジュニアスポーツの心理学*. 大修館書店：東京, pp.73-84.
- Steffen, K., Pensgaard, A.M., and Bahr, R. (2009) Self-reported psychological characteristics as risk factors for injuries in female youth football. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 19:442-451.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門. 講談社：東京.
- Wang, C.K.J., Biddle, S.J.H., and Elliot, A. (2007) Approach and avoidance goal profiles in physical education. *Psychology of Sport and Exercise*, 8:147-168.
- Wang, C.K.J., Koh, K.T., and Chatzisarantis, N. (2009) An intra-individual analysis of players' perceived coaching behaviours, psychological needs, and achievement goals. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 4:177-192.
- 山本嘉一郎 (1999) 共分散分析とその適用. 山本嘉一郎・小野寺孝義編. *Amosによる共分散構造分析と解析事例*. ナカニシヤ出版：京都, pp.1-22.

平成24年12月15日受付
平成25年2月19日受理